くらし　環境

環境考える薬剤師に

――熊大薬学部が育成プログラム

命だけではなく、環境も守る行動派の薬剤師や薬学研究者を育てよう―。熊本市の熊本大薬学部は2008年度から、学生を対象に環境問題に積極的に取り組む人材の育成プログラムを実践している。水俣病患者との交流や農業体験など、薬学の枠を超えた幅広い取り組みが始まっている。（久間孝志）

水俣病患者と交流、農業体験…

「幅広く活躍する人材を」

水俣病患者の話に耳を傾ける学生たち＝水俣市の「ほっとはうす」

6月23日、水俣市浜町。水俣病の胎児性患者らが通所する施設「ほっとはうす・みんなの家」に、同学部の学生たちが集まった。父親が原因企業チッソで働いていたこと、歩けるようになるのが遅く三輪車を車いす代わりにしていたこと、小学生のころいじめられた経験―。胎児性患者の永本賢二さん(49)が語る体験に、学生たちは真剣に耳を傾けた。永本さんらの指導を受けながら、押し花を使ったしおり作りにも挑戦した。

この日、同学部が取り組む「エコファーマを担う薬学人材育成プログラム」で水俣市を訪れたのは1年生約90人。2班に分かれ、ほっとはうすと市立水俣病資料館を交互に訪問した。

宮崎県延岡市出身の中村純平さん(18)は「教科書でしか水俣病を知らなかったが、患者さんの苦しみが伝わった。化学物質は薬として役立つだけでなく、公害や薬害を引き起こす負の側面を持つことを痛感した。貴重な経験になった」と話した。

同学部は01年、薬学部としては全国の大学で初めて環境マネジメントシステムの国際規格「ISO14001」の認証を取得。02年には、大気や水などの公衆衛生にとどまらず、地球温暖化や酸性雨などグローバルな問題を扱う課目「環境薬学」を設けるなど、学生への環境教育に力を入れてきた。同プログラムは、その発展形だ。

「エコファーマ」とは、エコロジカルとファーマシーを合わせた同学部の造語で、「環境に配慮した薬学」という意味。08年11月、文部科学省の「質の高い大学教育推進プログラム」に採用され、本格的にスタートした。

これまでに、熊本市の立田山や阿蘇での野外薬用植物観察会やC型肝炎訴訟に携わった弁護士らを招いた講演会、水俣市での体験学習を定期的に実施している。

本年度は、さらに内容を充実。宇城市での農業体験を始めたほか、インターンシップと絡めた製薬会社の環境保全策の調査、英国やラオスでの海外研修などを計画。7月には一般公開のシンポジウムも開く。

一方、既存の授業課目や実習も環境問題の視点を強化。これらの課目の単位を取得し、野外薬用植物観察会や講演会、体験学習などに一定以上参加した学生には、卒業時に同プログラムの修了認定証を交付する。

薬学部出身者は、薬剤師や研究者になるというイメージが強い。しかし、白﨑哲哉准教授は「これまでは人の命を守るのが役目だと思われてきたが、視野を環境問題にまで広げる必要がある。環境を守ってこそ、人の命も守れる」と指摘。「環境問題の解決には〝薬物の専門家〟である薬学部出身の人材が必ず貢献できるはず。環境に配慮した製品開発や地域づくりなど、これまでの既成概念にとらわれない幅広い分野で活躍できる人材を育てたい」と意気込んでいる。

「エコファーマを担う薬学人育成プログラム」の一環として、熊本大薬学部は28日、一般公開のシンポジウムを開く。

水俣病の研究を続ける熊本学園大の原田正純教授が「つながりめぐる〝いのち〟―水俣学事始」、元環境省事務次官の炭谷茂氏が「環境福祉学と薬学の接近」と題して話す。熊本ラオス友好協会の坂井弘臣会長、東京大環境安全本部の小山富士雄副部長も講演する。

28日に一般公開シンポ

午後1時から、熊本市大江本町の同学部「宮本記念館コンベンションホール」で。参加無料。同大大学院医学薬学研究部環境分子保健学分野☎096(371)4335。

ご意見は〒860-8506 熊日暮らし情報部へ ファクス096(361)3290 kurashi@kumanichi.co.jp